徳島大学総合科学部　人間科学研究
第8巻（2000）55－74

火のある風景描画法を「読む」ためのヒント（Ⅱ）

－ＦＬＴにおける「太陽」と「火と水の関連」が象徴するものについて－

石　田　　弓 1)

Hints for Understanding "Fire in Landscape Technique"（Ⅱ）

About the symbolic meanings of "the Sun" and "the interrelations between Fire and Water" in "Fire in Landscape Technique"

Yumi　ISHIDA 1

Department of Psychology, University of Tokushima

ABSTRACT

In "Fire in Landscape Technique" (hereafter abbreviated as FLT), we can often see cases where clients draw "the Sun" as the representation of "Fire" and something else related to "Water". At first, literature in the fields of folklore, cultural anthropology, mythology and psychology is reviewed. Then the symbolic meanings of "the Sun" and of "the interrelations between Fire and Water" in FLT are examined on the basis of the reviewed literature.

As a result, "Fire" and "the Sun" are found out to be in close relation with each other. Especially in the case of schizophrenic patients, "the Sun" is found to indicate the transition of their disease. In addition, it is also revealed that the conflicting and/or cooperative meanings between "Fire" and "Water" may delineate clients' inner worlds and may project their inner conflicts and recovery processes. Finally, examining the symbolic meanings of "the Sun" and "the interrelations between Fire and Water" in FLT can provide various useful hints to understand clients' inner worlds.

Key Words: Fire in Landscape Technique, the symbolic means of "the Sun", the symbolic meanings of "the interrelation between Fire and Water"

1．はじめに

本論のＩでは，「火」がもつさまざまな機能や象徴的意味について整理することで，火と心とのつながりの深さについて知ることができた。そして，歴史を通じて人々が火のなかに読み込んできた象徴的意味や火と接することで得られる内的感覚などが，「火のある風景描

1）徳島大学総合科学部

1．Faculty of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima

画法」（以下，ＦＬＴとする）にも表されることが分かり，これを心理臨床場面で有効に用いるためのヒントを見出すこともできた。本論のⅡでも，ＦＬＴに表される火の意味を理解するためのヒントについてさらに検討していくが，ここではＦＬＴの「火」としては特殊なものである「太陽」の意味と，「火」と相反する性質をもつ「水」と「火」の関連が意味するものについて考えてみたい。また，ＦＬＴ以外の描画法に表された「火」の意味についても検討する。これらの視点は，以下のような問題意識から提起された。

ＦＬＴでは，「火のある風景」を描くことが教示されるが，地域によっては「ひ」という発音が「日（陽)」，すなわち「太陽」を指す場合もあることから，筆者は教示のなかで「燃える火」を描くことを明確にしている。しかし，それにもかかわらず「火」として「太陽」が描かれる場合がある。しかも，こうしたクライエントは，描画後の質問である「描画時に他に思いついた火」において，ごく一般的な火も思い浮かべていたことから，求められた課題を理解しながらも「太陽」を描いているのである。また，こうした「太陽」は特に分裂病者に多くみられるが，分裂病者にとって「太陽」は特別な意味をもつのであろうか。そもそも「火」と「太陽」の間には，なにか特別なつながりがあるのであろうか。

一方，ＦＬＴの風景全体のなかに，なんらかの「水」が描かれることもある。「水」は「火」と反対の属性をもつために，「火を消火するもの」としてイメージされやすい。しかし，ＦＬＴに表される「水」は，常にそうしたものばかりであろうか。そもそも「火」と「水」にはどのような関連性があるのであろうか。そして，ＦＬＴにおける「火」と「水」の関連が意味するものが，クライエントの内的世界を理解するための一助になり得るであろうか。

以上のような疑問に応えることは，ＦＬＴを用いてクライエントを理解するための視点をより豊富にするという意義がある。

また，心理臨床場面における他の描画法に表された「火」にはどのようなものがあり，これらがいかなる意味をもつのかについて検討することも，ＦＬＴを「読む」ための準拠枠を提示することになると思われる。

さらに，本論では，以上のような作業を通じて，ＦＬＴにおける火の意味を吟味するためのヒントを増やすだけでなく，ＦＬＴの描画法としての独自性 originality についても考えてみたいと思う。

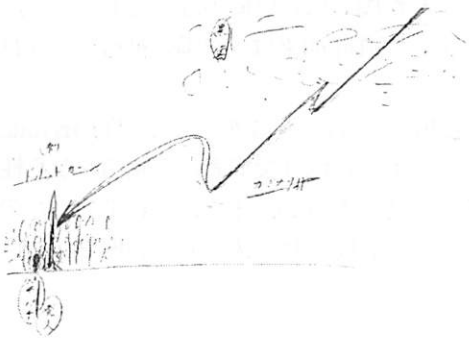
2．「火」と「太陽」の関連について

1）天の火たる太陽

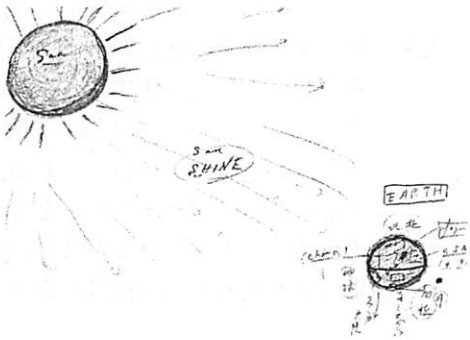
まず，「火」と「太陽」の関連について考えられていることを民俗学や文化人類学，あるいは神話などの領域から整理してみたい。田中（1974）は，日本語の「火」と「日」は「音韻史的に別の語であった」が，わが国には「太陽と火との間に観念上のつながりを前提とした自然観があった」と述べている。松前（1974）も「太陽と火との結びつき」が未開民族に広くみられ，古典世界でも知られていたことを指摘している。例えば，古代人にとって，落雷による「火」は「天」すなわち「太陽」からもたらされた火と感じられたかもしれない。また，火の明るさや暖かさは，太陽のもたらす明るさや暖かさと無縁ではなかったであろう。火が歴史を通じて「神性」なものとみなされてきたのも，「火の発生のイメージが，『天』のなかに存在した」（林屋，1996）という観念と関係しているものと思われる【描画１～３】。

また，世界中に太陽崇拝や太陽神話が存在するが，「古代インドの火神アグニは，灼熱の

太陽そのもの」（田中，1974）と考えられていた。わが国でも太陽神「アマテラス」が存在するが，『古事記』のなかの『ヤマトタケル伝説』では，東征に旅立つ「ヤマトタケル」に「ヤマトヒメ」が火打石を贈り，これによってヤマトタケルは窮地を脱することができた。これを受けて，大林（1983）は「天の火たる太陽を祀る者が地上における火を起こす道具を与えることによって太陽の子孫の東征を保護した」ところに「太陽と火の隠れた結びつき」がうかがわれると述べている。他にも，わが国では沖縄において，火の神が太陽と同一視されている（松前，1974）。

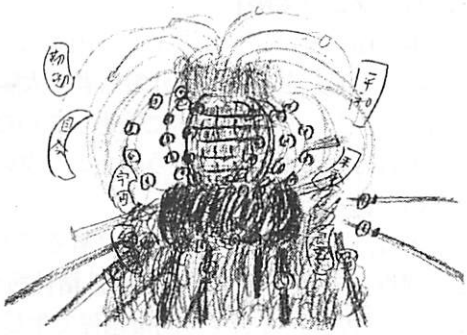


【描画1】落雷と山火事（気分障害男性51歳）
1回目のＦＬＴには，強い勢いで矢印状の「稲妻」が描かれた。まさに「天から降ってきた火」である。「落雷」は易怒性の高いこの男性の攻撃性を示すものと思われるが，山火事の火はまだ小さい。早めの対応が必要である。



【描画2】地球を照らす太陽（気分障害男性51歳）
「落雷」の8ヵ月後に描かれた2枚目は，地球に光と熱の矢を放つ誇大な印象のある「太陽」であった。いずれも原初的なイメージとしての「天の火」であり，普段から退行的で誇大感をもつ男性の自己像が表れている。

【描画3】太陽（分裂病女性27歳）
生物にとって「太陽」は命の源である。プランターの花は入院中のこの女性の自己像であり，回復や成長に必要なエネルギーを一身に受けている印象がある。「太陽」は「依存対象」としての治療者のイメージであろうか。



【描画4】とんど焼きの火（分裂病男性42歳）
「とんど焼き」には，太陽が衰えた冬に，その活力を回復させ，豊作を願うという解釈もある。また，この火で焼いた餅を食べて無病息災を願う。この男性のなかでも「内なる祭」が行われ，回復へと向かうのであろうか。

また，清水（1974）は「地上の火，つまり人の家族的生活の火は，大地の豊穣の源である神・太陽と象徴的に結合されている」と言う。松前（1974）も「カマドや家の火の神が，太陽神と同一視されているのは，インドのアグニ崇拝や，ペルー・インカの太陽神殿の例に見えるように，他の民族にもある」と述べている。

こうした神聖な火を用いて，古代からさまざまな「火祭り」が行われてきた。松前（1974）によると，「火祭り」は世界中で夏至や春分などの季節の替り目に行なわれており，その意義や機能はさまざまであるが，「原義は太陽の光熱を回復，更新させるためのもの」であったという【描画４】。

さらに，「昇る太陽」や「沈む太陽」にも特別な意味がある。リース Riess, G.（1986）は，夢のなかに表れる「昇る太陽」は「新しいエネルギーが解放されて，生命過程がふたたびはたらきはじめること」を，逆に「沈む太陽」は「活動的な生命からエネルギーが抜きとられ，気分が陰うつになる」ことを意味すると述べている。わが国の仏教信仰のなかでも，古くから太陽の昇る東や太陽の沈む西への信仰をもっており，阿弥陀如来は「夕陽の神格化」されたものと考えられていた（田中，1983）。

以上のことから，「火」と「太陽」を関連づける発想は，宗教に起源をもつ原初的 archaic なものであり，ＦＬＴに描かれる「太陽」もクライエント（特に分裂病者）の原初的な心性や宗教的・超自然的発想との親和性を反映しているのかもしれない。また，ＦＬＴのなかの「太陽」の動き（つまり，昇る太陽か，沈む太陽か）が，心理アセスメントや心理療法を行う上で重要な意味を有する可能性もある。

2）分裂病者と太陽

「火」と「太陽」の結びつきや「太陽」の象徴的意味について概観したが，ＦＬＴにおける「火」として「太陽」を描くものに，分裂病などの精神病に罹患したクライエントが多い。ここでは，分裂病と太陽との関連について宮本（1974）の研究をみてみたい。

a）ムンクと『太陽』

宮本（1974）は，ノルウェーの画家ムンク Munch,E.がオスロ大学の大講堂に描いた壮大な壁画『太陽』をあげて，分裂病者と太陽との関係性について考察している。精神病理学者の間では，ムンクは分裂病に罹患していたと考えられており，有名な『叫び』にも分裂病心性が表れているという。こうしたムンクの病状が回復していく過程で，この『太陽』が描かれたのである。

宮本は，ムンクのフィヨルドに昇る『太陽』が「病前と病後の創造的世界を峻別する大きな転回点」になっており，「妄想性精神病からの回復」と大きく関係していると考えている。つまり，『太陽』は病状の回復過程で生じてきた内的なイメージであると言うのである。

一方，この『太陽』と呼応し，ムンクの精神的危機（発病）の前触れを示す作品として，宮本は『叫び』を想定している。ここには太陽そのものは描かれていないが，背景の血のように赤い夕暮れが「太陽の死滅」を表していると言う。宮本自身も分裂病者と接するなかで，「太陽のことが語られる場合がけっして少なくない」らしく，発病に際して彼らの「太陽」がその明るさを減ずると体験される場合が珍しくないと述べている。こうしたことから，宮本は「太陽の出没がある特定の病機に関連していて，しかもそれが一つの契機になって症状の転回を誘い出すという独特の力動」があるのではないかと考えている。

したがって，ここでもＦＬＴに表された「太陽」の出没から，分裂病者の病状の悪化や回復を予測できる可能性が考えられる。

b）「太陽」をめぐる３種の精神病理

また，宮本は３つの分裂病症例をあげながら，分裂病者の太陽体験の「三原型」について考察している。

最初の症例は，フランス・ロマン派作家ジェラール・ドゥ・ネルヴァルである。ネルヴァルは33歳で発病し，その後も再発を繰り返しながら，47歳で自殺している。彼は再発による入院の直前に「世界没落を主題とする壮大な宇宙的体験」をするのであるが，ここで「黒い太陽」（le soleil noir）が表れたという。宮本は，ネルヴァルは発病の前段階で「太陽をしきりに求めていた」が，「明るい太陽」への希求はついに達せられぬまま「黒い太陽」，すなわち「太陽の死」を体験したと考えている。すなわち，ネルヴァルは「発病の前段階から妄想気分へという精神病的推移に平行しながら，世界のなかでの自己の立場が不確実になっていくと感じ，この不確実さのなかで自分が依拠すべき世界の中心を求めようとする」のであるが，ここで「世界（もしくは宇宙）の中心をなすものとして太陽の表象が浮か」びはしたものの，「『黒い太陽』しか見いだすことができ」ず，同時に「自分がいつのまにか世界の中心になっていて，世界が自分を中心として回っていることを悟る」というのである。これは「病初期ないし急性期において太陽との関係が前面に出る」型と言える。

次の症例は，フロイト Freud, S.でも有名なシュレーバーの症例であるが，彼の場合は「症状の固定した慢性期の誇大的世界が太陽体験の壮大な舞台となる」と言う。シュレーバーは神である「太陽」に対して優位を誇っていたが，後に神の光をすすんで受け容れることによって太陽との同化をはかりながら「みずから世界救済者としての誇大的確信」をかためていくのである。宮本はこうした「自我神話化や宇宙的自我肥大化の方向をたどる分裂病例」では，太陽との葛藤（「中心をめぐる葛藤」）のすえに「自己を太陽と同一視する場合が稀ではない」と言う。また，シュレーバーのような宇宙的誇大妄想は「太陽と合体することによって自己が世界のなかで確固とした『中心』の位置を占めるにいたった場合であり，逆にいえば，みずからが世界の『中心』と化すことによって世界の妄想化が安定した構造を獲得することを意味する」とも述べている。そして，ネルヴァルの「黒い太陽」と同様，シュレーバー症例も「太陽との関係が症状構成の中核をなし，もしくは太陽が症状変遷のかなめをなしている一つの典型」であったと考えている。

なお，宮本はグルーレ，H. W. の分裂病症例をあげて，分裂病者のなかには「太陽（＝神）と合一することによって至上の幸福感を味わう場合もある」と述べている。

最後は，ボス，M. が報告した症例である。この分裂病青年は激しい不穏状態のなかで，夜にもかかわらず昇る太陽がみえたという特異な「太陽幻視」を体験したが，その後に「激しかった不穏興奮状態が急速におちつき，その後，平穏な毎日」が続いたという。しかも，この太陽は青年にとって「生命力を付与する強者」であり，「すべての生命力・すべての成長力であると同時に，また万物を殲滅させる権能をそなえたものとして体験」されていたのである。宮本は，この症例では「太陽幻視が決定的な契機として病像に介入し，これを転換させて，治癒への道を拓いた」と考えている。

要約すると，ネルヴァルでは「病初期の妄想気分における太陽衰滅の様相」が，シュレーバーでは「慢性期の宇宙神話の根底にある太陽表現」が，そして，ボスの症例では「特異な太陽幻視でもって精神病的世界から脱却していく過程」が表されたことになる。こうしたことから，分裂病の病状の推移と太陽の出没には，密接な関連があることが推測される。宮本

自身も「病像転換の契機として太陽体験が存在した」症例を経験しており，「太陽が精神病理の次元に現象するその仕方はさまざまではある」が，「いずれの場合にも太陽が自然のなかの偶然的な一添景というのでなく，病者の体験野のなかである特殊な役割を演ずる代替不能の構成因のようにみえる」とまとめている。

c）「中心のイマーゴ」としての「太陽」

さらに，宮本は「中心」の概念を導入し，分裂病者にとって「中心」や「中心化」の機制は精神病理の核心によこたわる問題であると考えている。つまり，分裂病者においては「自分の立場が<いまここ>の地点に固定されることによって，主観的中心は同時に客観的中心と化してしまう」のであるが，「こうした病的世界への転回に際して病者自身が中心化の道程をたどると同時に，ネルヴァルの『黒い太陽』に象徴されるような太陽の衰滅ないし死を体験する」のである。そして，シュレーバーのように次第に「自らが太陽という名の中心に身をおく段階へと移行し，この時点で中心化は完成する」が，やがて「この中心を脱け出すにあたって，ボスの症例にみるような，昇る太陽もしくは太陽の復活を経験する」のである。こうした過程では，客観的中心として存在していたもの（太陽や神，あるいは家庭においては父親など）との「中心をめぐる葛藤」があると言う。そして，その上で「太陽は分裂病的世界の転回点（critical point）で出没することが明瞭」であると結論づけている。

以上，宮本は「太陽」の問題には「分裂病の精神病理をめぐる問題が少なからずまといついている」とし，これを「太陽の精神病理」とよんでいる。また，太陽の中心性は絶対的であることから，太陽を窮極の「中心のイマーゴ」と措定している。そして，分裂病者の描く「昇る太陽」は「脱中心化」を達成し，回復に向かう過程を暗示するものと考えている。

3）描画法のなかの「太陽表現」

次に，心理臨床場面で描画法を用いる過程で，「太陽」が表れた研究についてみてみたい。これもＦＬＴの「太陽」を理解していく上で重要なヒントを与えると思われる。

a）依存対象としての「太陽」

織田（1976）は，分裂病者の精神療法過程において，描画のなかに「太陽」が表れた４症例をあげ，その意味を検討している。各症例の言葉を引用すると，症例１は「太陽は暖かいから好きだ，心の淋しさを癒すために太陽を描いた」と語り，症例２は「太陽を描くということは淋しさや物足りなさの表現であり，先生にたよりたい先生が恋しいという気持ちが太陽として現れていた」と述べている。症例３も「太陽表現に明るさ・暖かさを求め，愛されたいかまってもらいたいという依存欲求」があると語り，症例４は「太陽は明るくてやさしい先生です」と述べた。いずれも「太陽」が依存の対象，特に治療者像としてイメージされている。織田は「４症例の分裂病者は，暖かさ・明るさ，あるいは満たされるものの象徴としての太陽表象に依存して，彼らの現実性を回復していった」と考えている。つまり，「太陽」は分裂病性危機の防衛手段として表れ，良い対象としての太陽像は分裂病者にとっての「内的な同一化の対象」となり，次第に内在化されていくのである。

また，分裂病者と太陽表象との関係は「人生早期の対象関係である乳幼児と母親表象との関係に似通っている」とも述べている。そして，「太陽表象にかわって治療者が分裂病者の

良い対象となることによって，病者は良い自己像を持てるようになり，自己像の統合化に向かい，分裂病性危機を克服」していくと考えている。

以上のことから，陽性転移のサインと考えられる太陽表現期は「精神療法を開始するために良い時期」であり，治療者が「太陽」に変わる良い対象となるためにも，「傾聴をこころがける」ことが大切であると述べている。

b）自己像としての太陽

同じく織田ら（1977）は，太陽を描き続けた１人の分裂病者の精神療法過程を紹介している。治療初期に２つの太陽が描かれたが，この分裂病者は「太陽が２つあって，上は明るい太陽で下は暗い太陽。下の太陽から出ているオレンジ色の光線は僕です」と述べている。そして，経過のなかで繰り返し太陽を描きながら「下のくらい太陽はにせの太陽，つまり僕で，海に沈んで死んだ」「にせの太陽つまりにせの僕が死んだから，２つの太陽が１つになった」「太陽を描かないとまださみしい」などと述べ，次第に太陽は消失していったという。これは「太陽」が自己像を表したものである【描画５】。

この症例から，織田は「描画中における太陽表現については，精神療法過程上の２つの意味を考える必要がある」と言う。１つは「分裂病者が妄想的分裂的態勢に退行した時には－（中略）－自己のネガチブな面を分裂した部分的な太陽表象に投影してそれと一体化することによって，病者は自己のポジチブな側面を防衛しようとする」というものである。もう１つは，「分裂病者の描画内容が非現実的な自己像を表現する時期から，現実的な自己像を表現する時期に移行する段階で太陽を描く」というものである。この時期を織田は「太陽表現期」とよび，「対象の分裂がある程度統合され，ポジチブな治療者イメージを持てるようになっている。つまりこの時期の太陽表現は，描画による依存欲求の表現」であると言う。そして，「この欲求がある程度満たされて初めて，分裂病者は太陽表現からの依存から解放される」と考えている。

以上のような経験から，織田（1981）は「太陽表現は非現実段階および現実段階への移行期の両時期にみられること，非現実段階における太陽は複数の太陽表現として現われ，病者が現実性を回復して次の治療的段階へ進むためには，これを死と再生の過程によって統合しなければならないこと，さらに移行期における太陽は病者の内的な依存欲求の表現であること」とまとめている。

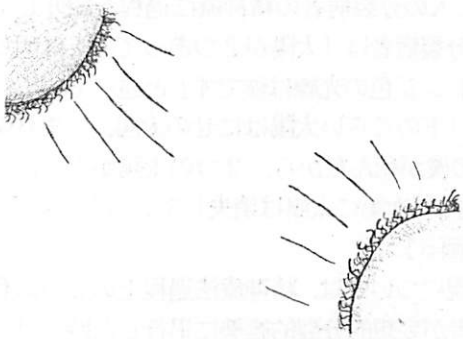
c）「心の中心」と太陽

さらに，織田（1981）は，太陽表現を含む「中心」に関する諸象徴の治療的な意味を体系的にとらえようとしている。すなわち，心の深層に中心的なるものの存在を仮定し，中心を希求する心性を「中心性」とよび，その治療的意味を考えたのである。

織田（1981）は，太陽に関する世界中の神話を概観しながら，「複数の太陽」の出現は，「深層の分裂およびそれに伴う心の危機的状況」を表現しており，また，「暗い（黒い）太陽」は「渾沌あるいは混乱の塊を意味し，心理学的に表現すれば影に支配された状態」であると想定している。しかし，「自我および深層の再統合を計ろうとする分裂病者は，統合を達成するために，自ら心の中心に対する回帰の願い，すなわち『中心性』を宇宙的世界に投影し，イメージとしての太陽を描画する」のであって，その際には「赤い太陽」が描かれ，

これによって「心の中心にあると想定される治癒促進作用を引き出そうと」するのである。

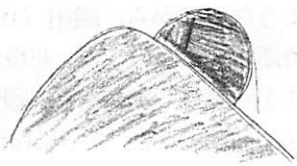
具体的には，「分裂病者は『非現実段階』において渦巻きや重層の円形を描き，暗い太陽や複数の太陽を表現する」が，後の「『現実段階への移行期』に至って，病者は統合された赤く明るい太陽を描画する」のである。ここで統合された赤い太陽は「再生の象徴」であり，それ以前に描かれる暗いあるいは黒い太陽は象徴的な「死」の体験を表わすものと考えられる。そして，精神療法では，分裂病者がこの「死と再生の過程を体験することによって，新しい統合に導くようにしなければいけない」と述べている。



【描画5】2つの太陽（健常者女性19歳）
上の太陽は赤く，下の太陽は黒く描かれた。健常者も太陽を描くことはあるが，「黒い太陽」は珍しい。集団施行のために詳しい説明は得られなかったが，「分裂病の世界」と親和性の高い女性ではないかと心配になった。

【描画6】夕陽（分裂病男性28歳）
山間に沈む「夕陽」を描いたが，「朝日」にもみえると言う。しかし，同時に施行したロールシャッハ反応は不良であり，状態の悪化が疑われた。「沈む太陽」はFLTにおいても病状悪化のサインとなる可能性がある。

【描画7】夕陽（分裂病女性40歳）
「沈む太陽」から病状の悪化が心配されたが，むしろ落ち着いていった。2週間前に描いた「朝日」を振り返り，「前回はまだ躁状態だったから朝日だった」と述べた。回復過程で「夕陽」が描かれたFLTは他にも存在する。



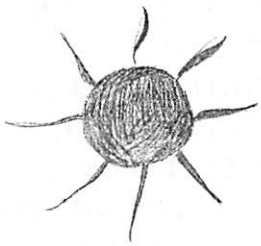
【描画8】朝日（強迫性障害？男性28歳）
分裂病疑いもある男性のFLT。1回目はまだ強迫症状に悩んでおり，統制の悪い「焚き火」が描かれた。しかし，1ヵ月半後には症状が消失しており，「前より気分が良くなったから」と言って笑顔で「朝日」を描いた。

d）高江洲らの研究

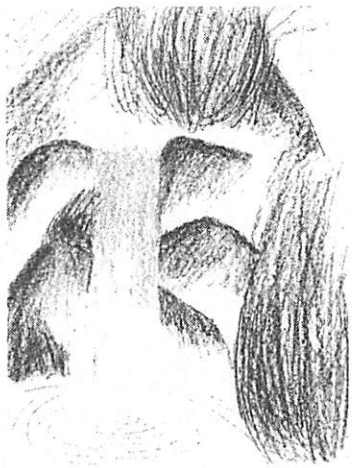
高江洲ら（1976）も，分裂病者の風景画において病状の動揺期に「太陽」が表れることに注目している。動揺期とは，発症期，急性増悪期，回復期などを指すが，「この時期に太陽が画面に登場することは，その後に彼らの描く風景が崩壊ないし再生に向かうことと関連

して」おり，「分裂病心性による世界変容が，世界のかなめとしての太陽を意識に」のぼらせる可能性があると言う。そして，「発症期の太陽を『沈みゆく太陽（日没現象）』と，回復期の太陽を『昇りくる太陽（日の出現象）』」とよんでいる。

以上，宮本や織田，高江洲の研究から，太陽は分裂病の精神病理と深く関連していることが分かる。しかも，太陽の出没の意味に関しては，ほぼ共通の見解が得られており，「昇る太陽」や「沈む太陽」は病状推移を予測できるようである。たしかに，ＦＬＴの「太陽」も「沈む夕陽」や「昇る朝日」あるいは「天頂の太陽」などに分類され，「昇る太陽」は回復過程で描かれることが多い【描画６～９】。しかし，風景の一部ではなく，「火」として「太陽」が描かれた場合，それはありきたりな「火」を差しおいて描かれたものであることから，クライエントにとって非常に重要な意味を有しているかもしれない。したがって，「太陽」が描かれた場合は，描画後に「どのような太陽であるのか？」「太陽は自分にとってどのような存在であるのか？」など「太陽表現」に固有の質問をしていく必要があると思われる。



【描画９】天頂の太陽（分裂病女性 41 歳）
約７ヵ月間隔で施行したＦＬＴは２回とも天頂に昇った「太陽」であった。入院治療を続けるが，病的体験は慢性化し，空笑や独語もみられる。太陽と同一化し，「宇宙の中心」に在るかのような体験を有するのであろうか。



【描画 10】自然の火と水（健常者男性 21 歳）
「滝が流れ落ちる周辺で，水をもろともせず火が燃えたぎっている」と言う。山火事ではない。「四元素」のなかの「火」と「水」だけがテーマとなったＦＬＴである。

３．「火」と「水」との関連について

火と同様に「水」も「四元素（地・水・火・空気）」あるいは「五行（木・火・土・金・水）」のなかに存在する。リクール，Ｐ．やレヴィ・ストロースは，宇宙に遍在する火や水が，人の心の内面を象徴するものであると考えている。また，火と水は相反する性質を備えているが，これらの２つの元素は古代から深いつながりをもっていたようである。吉田・大林（1974）も，火と水が「一方で相反する，絶対に相容れないようなものでありながら他方では微妙なしかたで結びついている。火と水の神話における関係というのは，複雑なものがある」と述べている【描画 10】。そこで，まず火と水の関係ついての神話をみてみたい。

１）神話にみられる「火」と「水」の関連

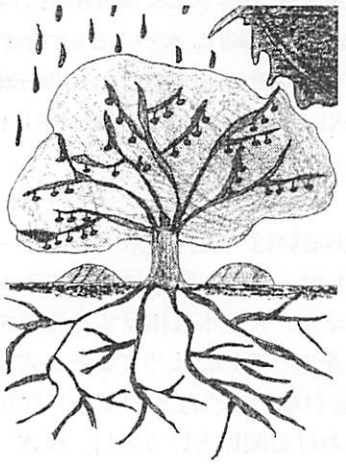
大林（1983）は「古代日本の火の起源神話の一つは，海から火が発生したという観念を

示している」と言う。『古事記』のなかでは「クシヤタマ」という神が鵜に変身し，海底から取ってきた海草から火切臼や火切杵をつくり，これで火を起こしたのである。これは「火の起源が海にあるという神話」（大林，1983）と言える。同様に「海中より最初の火を取り出した神話」は沖縄にもある（松前，1974）。

また，火の神が水のなかから誕生したという神話も世界各地にみられる。例えば，インドやイランには火の神「アパーム・ナパート」が存在するが，これは直訳すれば「水の子孫」という意味であり，火の神が水のなかから誕生したとするものである。古代インド神話に登場する火の神「アグニ」も「女性の水の子」である（田中，1974）。この他にも，台湾のパイワン族，フィリピン，ミクロネシアのギルバート諸島，ポリネシア飛地のオントン・ジャヴァ島，ハワイ，北アメリカの北西海岸などにも，火の神が水のなかから誕生したという伝承がみられる（大林，1983）。

さらに，太陽が水のなかから誕生するという神話も世界中に存在する。『古事記』や『日本書紀』では，太陽の女神「アマテラス」が水辺あるいは水中において誕生したとされている（大林，1983）。ニュージーランドのマオリ族でも「太陽は毎夕，洞窟の中に沈み，そこで《生命の水》の中に浴して活力を新たにして，次の黎明にまた昇っていって人々を照らす」と考えられていたり，中国でも「水浴する太陽のイメージ」がみられる（大林，1983）。

こうしてみると，火と水の関係は単に対立するものとしてだけでとらえることはできない。対立しながらも，両者が結びつく神話もある。例えば，「古代ローマのかまどの女神のウェスタは，自分の神殿の中に絶対に水をためておくことを許さない」，つまり，火は水を忌避するのであるが，「他方では，火が水から生まれるとか，あるいは火の神が水の中に逃げ込むとか，水の中にいるというようなことが出てくる」という（吉田・大林，1974）。『古事記』にも火と水の葛藤とでも言えるような神話が多くみられる。「マヤサチヒコ」「ホムチワケ」「ヤマトタケル」はいずれも火の男の神であるが，彼らはいずれも「水の女性の神」と一度は結ばれるが，別れてしまう運命にある。これを受けて，吉田・大林（1974）は「結



【描画 11】太陽と雨（分裂病型人格障害男性 43 歳）
分裂病圏の病理が疑われる男性。「太陽」と「雨」があって，木は根を張り，枝が伸びて実がなるといったストーリーを作る。火と水が協同して生命が育まれるイメージ。

【描画 12】海辺の焚き火（気分障害男性 52 歳）
寒いときに漁師が火にあたっている風景。気分障害，特にうつ病性障害のＦＬＴには「水」が描かれることが多い。これは風景としての「海」であるが，無意識的には「火」との関連でイメージされた「水」かもしれない。

局，火は水を必要とし，まさに火のプロパーな相手，結婚の相手は水である。しかし，そうかといってもいつまでも二人がうまくいくのではない。別れざるを得ない」と述べている。

また，中国地方には，田の神「サンバイ」についての神話がさまざまに語られているが，サンバイは日神と水の女神との結婚によって生まれたものであり，「太陽と水の霊の完全な受胎作用によらなければ，稲霊の誕生は不可能だと信ぜられていた」ことを示している（大林，1983）。たしかに，太陽と水はともに作物の成長に必要であり，「火」と「水」が協同することによって生命が育まれる場合もある【描画11】。

さらに，火が水界に由来するという観念は，古代だけでなく，今日の民間信仰にもその痕跡が残されている。大林（1983）は，その代表例として「ヒョットコ」をあげている。「ヒョットコ」は「火男」であるが，「元来は水界の存在」であった。そして，「日本においては火と水は対立するものではあるといえ，その一方では両者の間には隠されたつながりがあり，しかもそれは古代から現代まで続いている」と述べている。

2）心理学における「火」と「水」の関連

以上のことから，ＦＬＴのなかに表れる「水」は，単純に「火」の「反対物」「対立物」としてだけでみてはならないもののようである。そこで，次は心理学的な意味における「火」と「水」の関連についてみてみたい。火と心の関連について考察してきたフロイト Freud, S. やリースなどの心理学者は，これらの関連をどのようにとらえているのであろうか。

a）精神分析学における「火」と「水」の関連

フロイト（1930）は『文化への不満』のなかで，原始人は習慣として「火を見たらそれを放尿で消すことによって火にたいする幼児的快感を満足させていたのではないか」と述べている。精神分析的に解釈すると，放尿によって火を消すことは「男性相手の性行為，同性愛上の競争での男性の性能力の誇示」を意味している。しかし，「はじめてこの快感を断念して火を消さなかった人間は，その火を持ち帰り，それを自分の役に立てることができた」と考えたのである。これは「自分自身の性的興奮の火を静めること」によって，「自然力としての火を手なずけた」ことを意味しており，それゆえに「火の発見というこの偉大な文化的征服は，欲動断念にたいする報酬である」と言うのである。そして，ここからフロイト（1932）は「火を支配するためには，放尿によって火を消すという性愛的快楽をまず断念することが前提になる」という仮説を立てている。

また，フロイト（1932）は『火の支配について』のなかで，原始時代の人々にとってめらめらと燃えあがる炎は「男根の象徴」であり，神話のなかで火が「ペニスを意味することはまぎれもないこと」であったと述べている。「火が発散する暖かさは性的興奮状態で起こるものと同じ感覚を呼び起こすし，炎の形や運動は活動中のペニスを連想させる」と言うのである。

さらに，『火の支配について』のなかで，フロイトは「火」と「水」の関連について述べるにあたって，『プロメテウス神話』と『ヘラクレス神話』をあげている。英雄プロメテウスは，神々から「火」を盗み「中空の幹（ウイキョウ）」のなかに隠したのであるが，精神分析的に解釈すると，これは「ペニスのなかに火を隠す」ことを意味している。しかし，本来「人がペニスの中にたくわえているのは，火ではなくて，反対に火を消すためのもの，す

なわち放尿するための水」であることから，フロイトはここで事実から神話内容への移行過程で当然起こると予期される「歪曲現象」が起こっていると考えている。

一方，英雄ヘラクレスは，無数のめらめらと燃え上がるような蛇の頭をもつ「レルナのヒドラ」と戦い，その不死の頭を火で焼きつくすことで勝利をおさめたとされている。ヒドラは「水龍」であるが，フロイトはこの「火によって征服された水龍」の神話を理解するにあたって，夢の解釈と同様に内容の「反転」を行うことで，「ヒドラは燃焼する火（情熱）であり，そのめらめらと燃えるような蛇の頭は燃焼する炎（情熱の炎）」を意味しているのであって，ヘラクレスはこの燃え上がる「火」を「水」によって消したと考えている。そして，「プロメテウスは『蒙古人の禁令』と同様，火を消すことを禁じていたが，ヘラクレスは火災の危険がさし迫ったさいには，火を消すことを許した」ことから，ヘラクレス神話が「火の獲得の動機にたいする後期の文化時代の反応と一致している」と考えている。

また，この論文の最後では「男性のペニスは二つの機能」（すなわち「尿の排出」と「性器のリビドーの渇望をいやす愛の行為」）をもつが，これらは火と水が相容れないように，互いに相容れないことから，「人は己の火を己の水で消すものだ」と締めくくっている。

以上が，フロイトにおける「火」と「水」の関連についての記述である。「火」は性的欲動を象徴しており，この欲動の充足や断念との関連で「水」が理解されている。ここでは「火」と「水」の対立が強調されている印象があるが，この対立は葛藤や緊張をはらんでいるがゆえに，そこには心の葛藤や矛盾が投映されるされるのではないかと思われる。そして，このことはＦＬＴにおける「火」と「水」の力動関係に注目することの意義も示唆している。

b）『火の夢』における「火」と「水」の関連

リース（1986）のクライエントは『水の入った幅の広い古い湯ぶねの下で強い火が燃えている』という夢を報告している。リースによると「湯ぶねの下で燃えている性的なリビドーの火が，水という神秘的な原材料を熱する」のであるが，「この神秘的な原材料としての水は，あらゆる生命や意識を変化させ，ふたたび新たに生じさせる」ものであり，「創造的で母性的な無意識の象徴」であると解釈されている。つまり，創造性や母性を象徴する「水」は「エロスの火」によって温められ，その機能を活性化させるのである。したがって，心理学的な意味での「火」と「水」の関連は，矛盾や対立を表す一方で，これらが協同する際には，「創造」や「変容」あるいは「癒し」を引き起こす力を示すものと考えられるのである。

c）分裂病の精神病理における「火」と「水」

わが国では，平山（1982）が分裂病者の病的体験のなかに「火」や「水」に関する言動が表れることに注目し，この意味を探求するために「宇宙に遍在する火や水といった物質が象徴する機能と構造」について考えている。そして，エリアーデ，M．の言葉を引用しながら，火が「未開人や原始社会の人々」にとって「怒りと敵意，審判と滅亡の象徴」であると同時に，「聖性と尊厳，浄化と解放，勇気と勝利のシンボル」であったと述べている。ここでは「火の二面性」が強調されており，火は「人間の苦悩からの解放，新しい人間としての再生，復活，日常性や俗性の死と聖性や創造性などを象徴している」のである。

また，平山は昔から空間的には境界領域（俗なる場所から聖なる場所に移る境界の領域など）において，時間的には移行期や過渡期（誕生，結婚，政権や地位の交代，葬式などの人

生における節目）において祭儀が行なわれてきたが，その際に「死と再生」のシンボルである火や水が使われることが多いことも指摘している。こうした祭儀のなかでは「犠牲を通して神と人，人と人とが結合し，その結果として心の傷が癒されるという治癒的要素も含まれていた」ようである。そして，「急性分裂病においてしばしばみられる神秘的・超越的な病態の中で死と再生をシンボライズする火や水の関する言動が出現していること」は，彼らの心の深淵において「うちなる祭り」が行われ，現実から一時超越することによって，欲求不満が発散され，精神の治癒が引き起こされたことを示していると考えている。このことから，ＦＬＴに表される「火」と「水」も，ともに描き手の内的な「死と再生」，すなわち心の傷の回復過程やパーソナリティの変容を象徴する可能性があるのではないかと思われる。

3）ＦＬＴにおける「火」と「水」の関係

さて，ＦＬＴにおける「火」と「水」の関連は，どのようなかたちで表れてくるのであろうか。ＦＬＴのなかに「水」が描かれるパターンは，大きく３つに分けられる。１つは「川」や「海」のように「水」は風景の一部であり，「火」とは特に関係なく存在するパターンである【描画12】。また，「火事を消す水」や「防火用の水」などのように，「水」が「火」を消すために表れるパターンもある【描画13・14】。さらに，「風呂焚きの火」や「調理の火」のように「火」が「水」を温めるパターンもある【描画15】。

これまでの研究（石田，1997）では，気分障害者，特に「うつ病性障害者」のＦＬＴに「水」が表れやすく，これらは「消火のための水」（パターン２）であることが多かった。筆者は，これが気分障害者の「超自我」の強さや性的欲動と攻撃欲動の「中和」のプロセス（石田，1995）を表すものとして考察してきた。

また，「水」が風景の一部として描かれる場合（パターン１）でも，「火」すなわち自身の本能的欲動が統制できなくなることの不安を無意識的なレベルで軽減しようとする心のはたらき（防衛機制）を示すものとしての「水」なのではないかと考えている。

一方，パターン３のような「火」と「水」がむしろ協同することで，物質の「変容」を引き起こしたり，生命力の回復を促すようなものもみられる。【描画15】は，うつ状態からの

【描画13】山火事の消火（気分障害？男性54歳）
慢性的な抑うつ感に悩まされる男性のＦＬＴ。「火」と「水」の激しい相克を描くが，「火は次第に消し止められる」と言う。自身も消火活動に参加しているらしい。内なる破壊の炎を消し止めようとする姿であろうか。

【描画14】焚き火と防火用の水（気分障害女性45歳）
うつ病性の障害をもつ女性が，状態の安定してきた中間期に描いたＦＬＴ。落ち葉を焼いており，「一応水も描いた」と述べた。再び「うつの炎」が燃え広がり，支配されないように用心しての「防火用の水」であろうか。

回復過程（中間期）にある男性気分障害者によって描かれたものであり，気分的にもっとも落ち着いた状態にあった。「風呂」に入っている男性は，おそらくクライエントの自己イメージであり，「火」で温められた「水」によって心の傷が癒され，生命力も回復しているかのように感じられた。

4．他の描画法に表わされた「火」の意味について

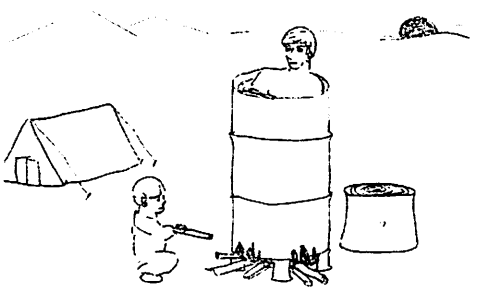
次は，他のさまざまな描画法のなかで「火」が表れた研究をいくつかみてみたい。ここから得られる知見は，ＦＬＴにおける「火」の意味を理解するために有益である。

1）他の描画法にあらわれた火

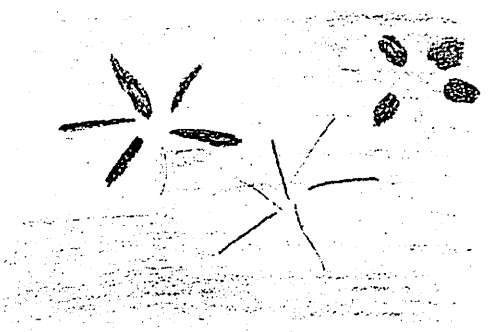
松橋（1983）は，てんかん病者であったターナーTurner, J. M. W.の絵画作品のなかに多くみられる「火の動き」が，「第１に，人間構造としての光彩の世界と暗塊の世界の有機的，力動的，流動的なつながりとして，第２に，破壊，壊滅の爆発的エネルギーとして，第３に，錬金術的な物質の変容と生成として，人間学的にとらえられる」と述べている。これはＦＬＴも含めた描画のなかの「火」（特に「火の動き」）にも，人間の本質や二面性が表れる可能性があることを示唆している。

山中（1994）は，自己臭症の女性が描いた「炎に焼かれる母という名の人」を紹介し，イメージのなかで「母親を紅蓮の炎で焼き殺すという危機があった」と述べている。また，織田（1978）は，19 歳の分裂病男性Ａが描いた「火山」について「Ａの自己像が爆発しそうになった火山に投影され，Ａが危機的な状況にいる」という不安を感じたと述べている。これらの事例は，描画のなかの「火」が，「自他」に向かう攻撃性や破壊性を表し得ることを示唆している。

ちなみに，織田（1978）の事例の男性Ａも，面接の初回に「小さい太陽」を描いている。これは荒涼とした印象を与える太陽であったが，その後の経過で描かれた「大木と馬と太陽」のなかの太陽は，治療者に対する「依存欲求」を示すものであり，治療者への陽性転移が投映されたものと考えられている。また，その後にも描かれた「海の日の出と松の枝」や「大



【描画 15】風呂焚きの火（気分障害男性 32 歳）
躁うつ状態を繰り返す男性が，うつ状態から回復した時期に描いたＦＬＴ。入浴しているのは，ようやく落ち着いた自身の姿であろう。「火」によって温められた「水」が心身を癒し，回復へと向かわしめるようなイメージ。



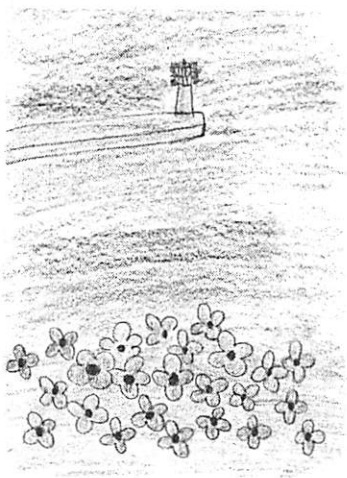
【描画 16】花火（分裂病女性 29 歳）
身体の汚れを強迫的に訴える女性が初めて描いた「花火」である。簡素ではあるが，複数の色彩を丁寧に用いている。暗闇を照らす一瞬の「明るさ」のような印象があったが，ここからなにかが変化していく予感もあった。

漁の祭」に表れた海に昇る「朝日」は，「希望の象徴」であり，病状の回復を示唆するものであった。このことから，ＦＬＴにおける「火山」などの「破壊的な火」にも，描き手の攻撃衝動が投映される可能性があるが，一方で「朝日」や「昇る太陽」などは，治療者への依存感情を意味していたり，病状が回復に向かう転換期に表れることが考えられる。

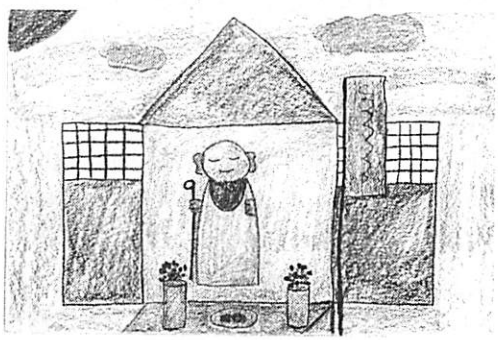
また，老松（1990）が紹介する接枝分裂病の男性の描画には，治療経過の初期に「噴火」や「西南戦争」など，終末・死・破壊のテーマが表れている。しかし，経過半ばを過ぎた頃には「花火」（花火に火をつける人物と細い線の花火など）が描かれた。老松はこれを「極微の，しかしＡさんにとっては大いなる変化を暗示するかのような作品」と感じたが，実際にこうした経過のなかで「Ａさんの大いなる一歩」が踏み出されたという。描画における「花火」は，病状の転換のサインとして表れる可能性がある。

2）筆者の描画経験から

筆者も老松の事例と類似した経験をもっている。かつて筆者（1991）は，数名の分裂病者に描画（自由画やＳ－ＨＴＰ法）を用いたアプローチを試みたことがあったが，そのなかに身体の汚れを強迫的に訴えるクライエントがいた。クライエントは最初，描画に全く関心を示さず，強迫的な訴えだけを繰り返したことから，筆者は描画を強要せず，傾聴に徹していた。しかし，１カ月半が経過した頃，クライエントは思いついたかのように描画に関心を示し，初めて描いたものが「花火」であった【描画 16】。非常に簡素なものであったが，今までまったく明るさのなかったクライエントの内的世界に，一瞬ではあるが初めて灯った「明るさ」のように感じられた。その後もクライエントは描画を継続できたが，これと並行して面接室における強迫的訴えが減少し，筆者との関係にも少し変化が生じてきた。また，病棟での活動にも広がりがみられ，主治医や看護スタッフも驚きを示していた。そして，「花火」から約２ヵ月後の７枚目の描画では，「燈台の灯」が描かれた【描画 17】。これは暗闇をさまよってきたクライエントに，わずかではあるが安心感を与えることができるようにな



【描画 17】燈台の灯（分裂病女性 29 歳）
「花火」から２ヵ月後に「燈台の灯」が描かれた。「光」を放つ様子が，赤色で描かれている。暗闇を照らす点で「花火」と共通性をもつ。筆者への信頼感を表すものか。



【描画 18】お地蔵さまと太陽（分裂病女性 29 歳）
「燈台の灯」の翌週に描かれた。左上に赤い「太陽」が描かれたが，それ以上に「お地蔵さま」から安心感が得られる。これも筆者のイメージであろうか。明るい火を描くこと自体に治療的な作用があるように感じられた。

った筆者を表しているような印象があった。また，翌週の８枚目では「お地蔵さま」と「太陽」が描かれた【描画 18】が，これらもクライエントを見守る筆者のイメージであるように感じられた。

以上，描画における「花火」や「燈台の灯」あるいは「太陽」などの「火」のもつ明るさや暖かさには，やはりセラピストとの関係性が表される可能性がある。そして，こうした経験も筆者がＦＬＴを考案するきっかけになったのである。

3）佐藤の「火焔描画法」

筆者がＦＬＴを考案する 15 年以上前に，わが国ではすでに「火」の描画法が存在していた。佐藤（1978）の「火焔描画法」がそれであるが，筆者はＦＬＴの研究を進める途上で，その存在を知った。ＦＬＴでは「火のある風景」が課題となるが，火焔描画法では「燃えあがっている焔」を描くように教示される。自由度は後者の方が高いが，火焔描画法でも火以外のものが描かれることがあり，逆にＦＬＴでも風景描写がなされない場合もある。

佐藤は火焔描画法を考案するにあたって，「現在のわれわれの心の底に流れている原初性の象徴的な媒介者として火をとらえ，それの描画の中には時を超えた『原初心性のかたり』がある」と考えている。そして，描かれた焔の比較的客観的な側面を検討するために，10 項目の描画特性（①焔の大きさ，②焔の描写線の密度，③焔の濃淡，④焔の形態，⑤描画線の特性，⑥焔の輪郭線や中心部の強調，⑦焔の分割，⑧飛火またはヒノコの存在，⑨燃焼物の描画，⑩地面線・背景などを描く場合）を設定し，これらを記号化できるようにした。その上で，①10 項目の特性の相互連関の検討，②臨床群間差（正常成人群，精神神経症群，精神分裂病群，うつ病群，躁状態群，精神病質群，脳外傷後遺症群，精神薄弱群，てんかん性障害群，老人性精神障害群）の検討，および③ロールシャッハ・サインとの連関の有無の検討を行なっている。

例えば，「火の形態」を「Ｖ型，Ａ型，Ｈ型，Ｏ型など」に分類し，Ｖ型の焔が「男性イメージ」と結びつき，Ａ型の焔が「女性イメージ」と結びつく可能性を述べている。火が性と関連が深いことは，本論Ｉでも述べたとおりである。また，「火の二面性」の概念が火焔描画法を理解する上でも重要であると言う。そして，筆者のＦＬＴ研究も，こうした佐藤の研究に多いに刺激されてきたのである。

4）放火犯の描画

火のもつ破壊力が，ときに犯罪に利用される場合もある。放火がその最たるものであるが，放火犯にとって火はなにか特別な意味をもつのであろうか。また，放火犯は描画のなかで「火」とどのように関わるのであろうか。

園部（1996）は，児童相談所において放火児童事例４例（いずれも小学生男子）の治療にたずさわったが，治療過程において積極的に描画を用いるなかで，児童に「薪を描かせてそれを燃やすように指示」した。するとこの児童は「最初は少しためらいながらも薪を燃やしてしまうなり，自ら燃やした薪にホースで水をかけて消してしまった」という。さらに，「マッチの赤い部分も炭にしてしまい，『あー，すっきりした』」と述べている。他にも，集団療法における貼り絵で「赤の使用が次第に減少し，緑色や水色の使用が多くなっていった」児童について報告している。その上で「この年齢の放火が，養育環境の問題のなかで，発達

期における攻撃性の反復，緩和，そして，攻撃性を置き換えた問題行動であるとする考えが，わが国の一般的な見解」であると述べている。また，描画における「放火ということを通して，また赤表現を通して少年たちが自分自身の中にある攻撃性，不満を処理することができた」のではないかと考えている。

したがって，ＦＬＴのなかで「火事」などの「破壊的な火」が描かれた場合も，描き手のなかの攻撃性が象徴的なかたちで処理されている可能性がある。実際にＦＬＴの感想のなかで「すっきりした」と答えた健常者もいた。火を描くことが，カタルシス効果をもつ場合もあるのであろう。

一方，分裂病者もＦＬＴのなかで「火事」などの破壊的な火を描くことが多い。これは「描画における放火」とでも言えるものであるが，分裂病者と放火にはなにか関連があるのであろうか。ここに興味深い研究データがある。

中田（1972）は，精神病と放火の関係について調べるために，46 例の精神病の放火事例を犯罪学的，精神医学的見地から検討している。その結果，従来から放火犯には精神異常者が多いこと，特に精神薄弱者に著しく多い事実が明らかになっているが，46 事例のうち 24 事例（52.2%）が分裂病者であったという。そして，放火の対象は「自己の住居」が多いこと，犯行時の年齢は一般の放火犯よりもやや高く，20 歳未満には少ないことなどが明らかになった。また，「放火には熱情ないし激情にもとづく行為が多く，激しい情動のさいには自殺の着想が浮かび，実際に自殺を実行する」こともまれではないとして，分裂病における「放火と自殺との密接な関連性」を認めている。

さらに，放火の動機は「幻覚，妄想などの病的体験にもとづく犯行」がもっとも多く，全体の半数を占めているのであるが，これは「病的体験による苦痛からのがれるための，病的体験への防衛としての放火」として一括できるという。妄想知覚や幻聴によって暗示ないし命令されて放火する場合もある。また，次に多かった動機は，他者から虐待や叱責などを受けたことによる憤怒や怨恨によるものであり，情動状態のなかで放火するという了解可能な場合もあることが分かった。しかし，こうした状態でも「分裂病に特徴的な人格変化，とくに易怒性，抑制欠如などが犯行実現に多少とも関与している」と述べている。

一方，小林・大原（1995）は，自殺を目的として放火した分裂病者の事例をあげている。放火という手段が選択された背景には「自己攻撃」要素と「他者攻撃」要素が両価的にみられたが，これ以外にも「アピール性の高さからも，自己の強さの証明もしくは存在証明（自己の回復）の手段として放火が選択された」，つまり「自己実現」希求としての要素も含まれていたのではないかと考察している。

こうした研究から，分裂病者がＦＬＴにおいて「火事」を描きやすいこと（石田，1996）も，「放火」とのつながりで理解できるかもしれない。つまり，ＦＬＴのなかで「放火」を行うことで，病的体験による苦痛からのがれようとする防衛的な意味があるかもしれない。また，ＦＬＴのなかの「火事」が，自殺のサインである可能性も考えられる。あるいは，小林・大原（1995）が述べるように，ＦＬＴにおける象徴的なかたちでの「放火」によって，「自己の強さの証明もしくは存在証明（自己の回復）」を行い，自己実現や新たな再生を志向しようとしているのかもしれない。

5．まとめ

筆者は「火」と情緒（感情・情動）とのつながりの深さや「火」のもつさまざまな機能や象徴的意味に注目し，心理臨床場面でＦＬＴを実践してきた。「火のある風景」という描画課題を媒介として，クライエントがいかなる意味を生成し，吟味しているのか，なにを伝えようとしているのかについて検討することで，クライエントの内的世界に対する理解を深めることができると考えている。

本論のⅡでは，特にＦＬＴにおける「太陽表現」と「火と水の関連」について検討した。「太陽」も「水」も古代から「火」と密接な関連をもつものであったがゆえに，それらがＦＬＴのなかに表れてきたときには，特に注意したいところである。そして，その意味を理解するためには，あらかじめこれらの関連について知っておく必要がある。

「太陽表現」に関して言えば，「火」と「太陽」のつながりは密接であり，特に分裂病者が描く「太陽」は，自己像を表していたり，依存対象としての治療者を表す可能性があることが分かった。また，病状の推移と「太陽の出没」に関連がみられたり，「太陽表現」そのものが治療的転回を引き起こす可能性もある。そこで，ＦＬＴのなかに「火」としての「太陽」が描かれた場合にも，これらの視点をもってその意味を検討する意義があると思われる。また，こうしたことは分裂病者に限らず，病理水準の異なるクライエントのＦＬＴについても考えられることであり，心理療法の経過を理解したり，クライエントとセラピストの関係を吟味する上でも有益なものとなるかもしれない。

一方，「火」と「水」の関連にしても，単純に対立するだけのものではないことが分かった。ＦＬＴのなかで象徴的に「火」と「水」を協同させることで，自身の心の傷を癒したり，生命力を活性化させたり，創造力を引き出す可能性もある。また，「火」と「水」が対立するなかに，クライエントのなかで渦巻く本能的欲動の相克を見出すことができるかもしれない。さらに，「防火用の水」が描かれる場合は，バシュラール Bacherald,G.（1932）の言う火の「一般的禁止」としての側面が強調されているかもしれない。つまり，クライエントの超自我機能や衝動に対する統制努力などが表されているかもしれないのである。

また，他の描画法に表された「火」の意味を整理することで，ＦＬＴを理解するためヒントが提示された。これまでの研究（石田，1995：1996）でも明らかになってきたように，「破壊的な火」が他の描画法においても自他に向かう攻撃性を表していることが分かった。しかし，一方で「花火」や「燈台の灯」などの明るさは，心理療法の過程においてクライエントのポジティブな変化を意味している可能性があることも分かってきた。

さらに，筆者は，心理療法という護られた枠のなかで，繰り返しＦＬＴを描くことによって，「火」すなわち「情動・衝動」の統制が改善される可能性もあるのではないかと考えている。火を「飼いならす」ことで，人類が発展してきたのであれば，クライエントがＦＬＴのなかで火と関わり，これを適切に表現できるようになることで，自身の情動や衝動の統制能力が改善されてくるかもしれない。そして，こうした点について今後も検討を重ねることは，ＦＬＴの描画法としての独自性 originality を打ち出すことにもつながると思われる。

最後に。本論Ⅰ・Ⅱでは，心理臨床場面でＦＬＴを「読む」ためのヒントを提示することを目的としていた。そして，民俗学や文化人類学，宗教，心理学，および哲学など広い領域における「火」の意味を概観することで，この目的はある程度達成されたものと思われる。しかし，リースの『火の夢』の訳者である渡辺（1992）が，「火が元型的なイメージを含んでいるかぎりにおいては，人類にとって普遍的な意味をもち得るだろうが，必ずしも火の特

定の意味が普遍化できるとはかぎらないことを肝に命じておかなければならない。私たちは，自らの手で自分の人生にとって固有な火のイメージの意味を明らかにしていかなければならない」と述べるように，ＦＬＴの「読み」に関しても単純にマニュアル化してしまうのではなく，クライエントにとっての固有な火の意味を吟味しようとする態度を忘れてはならないのである。

付録：ＦＬＴの描画後の質問

ＦＬＴに表された火の意味をよりよく理解していくために，筆者は次のような「描画後の質問」Post Drawing Inquiry を用意している。「火のある風景」の説明を求めるだけでなく，「火の燃え方」（この火は今どんな感じで燃えているのか？　「太陽」の場合は，いつの季節の太陽か？　どの時間帯の太陽か？），「火の起こり」（この火は誰がつけたのか？　「火事」などの場合は，どうして起こったのか？），「火のその後」（この火はこの後どうなっていくのか？），「描き手の登場」（描き手はこの風景や場面に登場しているか？　登場しているとすれば，どこで何をしているのか？），「他の火」（描かなかったが，他に思いついた火はあったか？）などを尋ねることにしている。その結果，描かれた「火」の特徴と質問に対する回答にずれが生じる場合もしばしばみられる。例えば，非常に激しい火を描きながら，「小さく燃えている」と説明されるような場合である。これによって，描き手に固有な「火」の意味が，より明確になる可能性がある。

なお，これらの質問項目は，リース（1983）が夢に表れた火を理解するために尋ねている質問事項（「何が燃えているのか？」「何によって発火したのか？」「この火によって何が結果的に生じているのか？」「自分には何ができるのか？」など）とほぼ一致しており，クライエントにとっての火の意味を個別に理解していく上で妥当なものであると思われる。

引用文献

Freud, S.　1930　*Das Unbehangen der Kultur.* 浜川祥枝訳　1969　文化への不満．フロイト著作集，3，文化・芸術論．人文書院，431-496.

Freud, S.　1932　*Zur Gewinnung des Feueres.* 木村政資訳　1969　火の支配について．フロイト著作集，3，文化・芸術論．人文書院，497-501.

Bachelard, G.　1938　*La Psychanalyse de Feu.* Gallimald, Paris.　前田耕作訳　1990　火の精神分析．せりか書房.

平山正実　1982　農村と分裂病．吉松和哉編，分裂病の精神病理，11，東京大学出版会，331-356.

石田　弓　1991　分裂病患者に対する描画を用いた接近　－描画導入期における描画特徴の変化と患者の変化－．広島大学教育学部心理学科卒業論文．未刊行.

石田　弓　1995　火のある風景描画法（Fire in Landscape Technique）にみられる「破壊的な火」の意味するものについての一考察．広島大学教育学部紀要第一部（心理学），43，199-205.

石田　弓　1996a　火のある風景描画法（Fire in Landscape Technique）における「風景画」の側面についての一考察．広島大学教育学部紀要第一部（心理学），44，149-157.

石田　弓　1997　気分障害者の火のある風景描画法 Fire in Landscape Technique に関す

る一考察．徳島大学総合科学部紀要人間科学研究，5，1-13.
小林一弘・大原健士郎　1995　自殺を目的とした放火．精神分裂病者の攻撃性と自己実現　精神医学，37（10），1112-1114.
松橋俊夫　1983　ターナー芸術における水の動きと火の動き．芸術療法，14，61-68.
松前　健　1974　文献にあらわれた火の儀礼．大林太良編，日本古代文化の探求　火．社会思想社，177-211.
宮本忠雄　1974　太陽と分裂病　ームンクの太陽壁画によせてー．木村　敏（編），分裂病の精神病理，3，東京大学出版会，233-263.
中田　修　1972　増捕犯罪精神医学．金剛出版.
織田法子　1978　描画によって表現された分裂病者の攻撃性．芸術療法，9，47-57.
織田尚生　1976　分裂病者にたいする描画を媒介とした精神療法的接近　いわゆる「太陽表現期」の意義について．芸術療法，7，17-24.
織田尚生・挟間秀文・有田茂夫・市川雅己　1977　分裂病者にたいする描画を用いた精神療法の技法　－1症例の治療過程を中心にしてー．芸術療法，8，17-25.
織田尚生　1981　心の中の中心関する諸象徴のもつ治療的意味．芸術療法，12，23-31.
老松克博　1990　絵画療法における変容の指標としての「文様化現象」について　臨界点の現象学的考察．心理臨床学研究，8（2），7-19.
大林太良　1983　太陽と火．太陽と月　＝古代人の宇宙観と死生観＝．日本民俗文化体系，第二巻，小学館，93-114.
Riess, G.　1986　*Traumbild Feuer*. Walter - Verlag AG, Olten. 渡辺　学訳　1992　火の夢．元素的な変容の力について．春秋社.
佐藤忠司　1978　火焔描画法．ロールシャッハ研究，XX，99-116.
園部博範　1996　描画表現を通した放火児童の理解と治療過程について．臨床描画研究，XI，238-255.
高江洲義英・高江洲田鶴子・吉田正子・国分京子・橋本ヒロ子　1976　精神分裂病者の風景画と「間合い」．芸術療法，7，7-16.
田中久夫　1983　他界観　ー東方浄土から西方浄土へー．太陽と月　＝古代人の宇宙観と死生観＝．日本民俗文化体系，第二巻，小学館，311-388.
田中克彦　1974　火に関するものの語源．大林太良編，日本古代文化の探求　火．社会思想社，271-291.
山中康裕　1994　治療としての描画．臨床精神医学，23（10），1143-1152.
吉田敦彦・大林太良　1974　対談・火の神話とシンボリズム．大林太良編，日本古代文化の探求　火．社会思想社，293-316.

（2000年9月22日受付，2000年9月29日受理）